



典午陽秋、休聽暇豫一朝鮮文士南九萬所述錢謙益考論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00016792

典午陽秋、休聽暇豫—朝鮮文士南九萬所述錢謙益考論¹

嚴 志 雄 撰
大 平 桂 一 訳注

翻訳にあたって

本論文は香港中文大学の嚴志雄教授の著、『牧齋初學集—詩文、生命、身後名』（Oxford大学出版局から2018年に出版された）に収められた文章である。『牧齋初學集—詩文、生命、身後名』の全体像については、『中國文學報』第九十一刷に載せた書評に譲る。今回翻訳した「典午陽秋、休聽暇豫—朝鮮文士南九萬所述錢謙益考論」は、康熙年間に清に使いした朝鮮の使臣南九萬の旅日記『甲子燕行雜錄』の記事を手がかりに、錢謙益の詩二首に深く秘められた内容を、彼の戦慄すべき典故運用能力とあわせて解明した好論文であり、私見によれば「情欲の詩学——錢謙益、柳如是、《東山酬和集》窺探」とともに『牧齋初學集—詩文、生命、身後名』所載の論文中双璧をなす作品である。

嚴志雄教授は香港中文大学で修士の学位を得た後、アメリカのイェール大学でPh.Dを取得し、台湾中央研究院中国文哲研究所研究員を経て、現職に就いた。著書に『錢謙益〈病榻消寒雜咏〉論釋』（2012年 中央研究院聯經出版公司刊）²『秋柳の世界清初詩壇側識』（2013年 香港中文大學出版社刊）など多数ある。

なお、本論文の翻訳の許諾は原著者から得ている。また、脚注は何も注記していないものは嚴志雄教授の注、「訳注」と注記したものは大平の注である。大平の注のうち、語釈のほとんどは『漢語大詞典』を参考にし、一々注記しない。

1 原著者による注：本文の初稿は、2015年5月30日-31日、日本の東京大学東洋文化研究所と台湾の中央研究院中国文哲研究所が共催した「世界の中の中国明末清初」国際学術シンポジウムで読み上げたものである。会場において、皆さんから貴重な修正意見を賜った。ここに謹んで感謝申し上げる。

2 訳者注：訳者は『錢謙益〈病榻消寒雜咏〉論釋』の中の二篇を翻訳し、大阪府立大学高等教育研究機構の紀要『言語と文化』に発表する予定である。

一、前言

清康熙二十三年甲子（1684）、朝鮮の使臣南九萬（ナムクマン、1629-1711）は命を奉じて中国に使いした。南氏は後に『甲子燕行雜錄』を著し、その中に次の一段がある。

館中愁寂たり、取りて冊鋪賣る所の小説を見るに、則ち陳亡びし後衣冠子孫隋室に仕えざる者を借りてこれが爲に説き、詩を作りて曰く、「民間定めて劉文叔³有らん、世外那んぞ張子房⁴無からんや」と。又た一畫廚の、天子と宮人、宦官の四時に隨いて淫樂するの状を畫くを見るに、其の冠服は皆清制なり、末に題して曰く、「成化二十二年[1468]太平遊樂の圖」と。乃ち是れ成化に假託するも、實は當朝を譏る者なり。人心の在る所、抑も知る可きなり。又た錢牧齋謙益の人に與うる詩を見るに云う、「請う看よ典午陽秋の例、載記分明にして琬琰に垂る」と。又た云う、「知る君王哀の傳を讀むを恥ずるを、但だ生徒をして蓼莪を廢せしむ」と。此れ等の如き作、鏤板して流布するも、以て罪と爲さず、豈に北人文無く、これを見るも覺らざるや？⁵

南氏が述べている錢謙益（牧齋、1582-1664）の詩句は、その「徐禎起に和す」と「侯研德に簡し並びに記原に示す」二詩に見える。この二詩は「冬夜假我堂文宴詩（序有り）」十一首中の二首（順治十一年[1654]の作であり、二つの詩は連作の中で相前後している）である⁶。

南氏はなぜこの詩句が清の朝廷のタブーを犯していると判断したのであろうか？「北人」（清人）がもしこの詩句を理解したら罪に陥れるだろうとはどういうことなのか？本稿では南氏の文章を手掛かりとして、牧齋の二つの詩を探究し、牧齋がこの二首に託した的確で深い寓意を発見した。「徐禎起に和す」では、牧齋は徐禎起（生没年不詳）に対して、明清交替期の歴史を記述する際には、『春秋』の華夷の区別を厳守し、明朝を尊び、清朝を排斥せよと要請している。「侯研德に簡し並びに記原に示す」詩では、侯研德（1620-1664）に対して、発奮して大事を為せ、伯父の侯嗣曾（1591-1645）、父の侯岐曾（1595?-1647）が相継いで清朝に抵抗し義に殉じたことを忘れるなど激励している。

3 訳者注：「劉文叔」は後漢の光武帝劉秀を指す。

4 訳者注：「張子房」は漢の高祖劉邦の軍師張良を指す。

5 南九萬撰、『甲子燕行雜錄』、その著『華泉集』（1723年刊本）（首爾、民族文化推進會、1994年『韓國文集叢刊』第131-132冊）、卷29、頁32b（493頁）に収録されている。

6 清錢謙益著、清錢曾箋注、錢仲聯標校、『錢牧齋全集』の『有學集』（上海、上海古籍出版社、2003年）、卷5、219-221頁。

二、清順治十一年冬、蘇州假我堂における詩文の会について

順治十一年甲午、牧齋は七十三歳であった。十月に、蘇州の假我堂で詩を読み⁷、興に乗って知り合いを集めて宴会を催し、その堂に三日間連泊したという当時の美挙であった。假我堂は、蘇州の張世偉（字は異度、1568-1641）の故居渚水園のことである⁸。

牧齋の「冬夜假我堂文宴詩」の序には次のように言っている：

嗟あ、地老い天荒れ、吾は其れ衰えたり。山崩れ鐘は應じ⁹、國に人有り。是に於いて緑水の名園に、燈を明して宵集す。金閨の諸彦¹⁰、燭を乗りて夜譚す¹¹。相い與に窮塵¹²に惻愴し、永夕に留連す。珠囊金鏡¹³、哀謝を斯文に攬る。紅藥¹⁴朱櫻¹⁵、昇平の故事に感ず。杜陵の箋注、豕魚を刊削す¹⁶。晉室の陽秋、烏索を鐫除す¹⁷。三爵にして既に酔い、四座誼びずしきこと勿し。良夜漸く闌け、佳詠繼いで作らる。甲帳¹⁸に悲

- 7 訳者注：嚴氏の原文は「觀詩」。『牧齋有學集』卷48「香觀說書徐元歆詩後」に、「余老嬾して詩を見るに耐えず、尤も今人の詩を見るに耐えず、人間の詩卷、聊さか一たび寓目すれば、狂華眼を亂し、蒙蒙然として几に隠りて臥す。隱者有りて告げて曰く、『吾れ子に語るに觀詩の法を以てせん。目をを用いて觀るは鼻を用いて觀るに若かず。』と」とあるのに基づくか？
- 8 張世偉は、明の処士で、「吳門五君子」の一人である。牧齋には「張異度墓誌銘」があり、錢謙益の『錢牧齋全集』の『初學集』に入っている。卷54の1361-1363頁。
- 9 訳者注：錢曾の注に、「『世說』文學篇に、「銅山西に崩れば、靈鐘東に應ず」という」とある。
- 10 訳者注：錢曾の注に、「江文通の「別賦」に、「金閨の諸彦」とあり、李善曰く「金閨は、金馬門なり」と。」とあり、ここでは朝廷の傑出した人士を意味する。
- 11 訳者注：古詩十九首の「生年不滿百」に「晝は短く夜の長きに苦しむ、何ぞ燭を乗りて遊ばざるや？」に基づくであろう。
- 12 訳者注：窮塵は深土中の深いところを指す。さらに黃泉を指す。
- 13 訳者注：錢曾の注に、「孔穎達『易經正義序』に、「秦金鏡を亡う（に及ぶ：訳者注、原文には「及」一字あり）も、未だ斯文は墜ちず。漢は珠囊を理め、重ねて儒雅を興す。」という」とある。
- 14 訳者注：「紅藥」は芍薬の花を言う。
- 15 訳者注：「朱櫻」は桜桃を言う。美女の唇の比喩によく使われる。
- 16 訳者注：『杜詩箋注』の校正を行ったことを言う。いわゆる「豕交魚魯」である。
- 17 訳者注：錢曾の注に、「『續顔氏家訓』音訓篇に、「南は北を呼びて索虜と爲し、大抵は後魏を呼ぶ、其の實を指すなり。蓋し北齊後周國を享けること日淺ければなり。北は南を呼びて烏夷と爲し、以て相い報復す、甚だ無謂なり。」という」とある。「烏」はここで言うように「烏夷」を、「索」は索すなわち辮髮を頭に結っていた北の民族を指すだろう。ここでは『晉書』が漢族以外の民族を本文から除いて載記に入れたことを言っているのであると考える。
- 18 訳者注：「甲帳」は漢の武帝が作らせた珠玉で飾ったテント。もう一つ乙帳を用意し、甲帳には神仙を住ませ、乙帳には自ら住んだ。『北堂書鈔』卷一三二に引く『漢武帝故事』に、「上は琉璃珠玉・明月夜光を以て天下の珍寶に雜錯せしめて甲帳と爲し、其の次を乙帳と爲す。甲には以て神を居らしめ、乙には以て自ら居る。」とある。

涼¹⁹すること、通天を拜するに似たり²⁰。銅板²¹を霑灑すること、渭水に臨むが如し。これを言えども足らず、慨して當に懐すべし。夜鳥は咽びて啼かず、荒雞は喔きて其れ相い舞う。美しきかな呉詠²²、諸君は既に斐然として章を成す²³。和するに楚聲²⁴を以てし、賤子も亦た慨然として賦す。老毫を以て我を捨てること無く、他人心有り、悉く敝賦を求めて以て致師せば²⁵、則ち吾は豈敢えてせんや？客は呉江の朱鶴齡長孺、崑山の歸莊玄恭、嘉定の侯沅（案ずるに「泓」に作るべきである）研徳、長洲の金俊明孝章、葉襄聖野、徐晟禎起、陳〔三〕鳥鶴客爲り。堂の主人は、張奕綏子なり。韻を拵りて詩を徴する者は、袁駿重其なり。余は則ち虞山錢謙益なり。甲午陽月二十八日²⁶。

この假我堂の会は、堂の主人が張奕（綏子、生没年不詳）であり、牧齋が宴会を行うことを提議し、袁駿（重其、1612-1684?）が牧齋に代わって客を招待した。宴会に赴いた者は七人、呉江の朱鶴齡（長孺、1606-1683）、崑山の歸莊（玄恭、1613-1673）、嘉定の侯泓（研徳）、長洲の金俊明（孝章、1602-1675）、葉襄（聖野、?-1655）、徐晟（禎起）、陳三鳥（鶴客、生没年不詳）たちである。すべて当時の名士で、文壇の才人であり、名望高き人々であった。

十数年後、朱長孺は「假我堂文譚記」を書き、この会を回想しており、我々が、当時の状況を復元・想像するよすがとなっている。

張氏の假我堂は待詔異度公の故居なり。地は胥關²⁷に偏く、園は勝賞多し。丁酉〔案

19 訳者注：「悲涼」の用例としては、唐杜甫「地隅」詩に、「喪亂 秦の公子（王粲）、悲涼 楚の大夫（屈原）」とあり、後の展開を考えると、錢謙益は杜甫の詩を意識していることは間違いないと思われる。

20 訳者注：錢曾の注に、「『南史』沈炯傳に「炯行きて漢武通天臺を經、表を爲りてこれを奏して曰く、「甲帳珠簾、一朝にして零落す。茂陵の玉盃、遂に人間に出づ」と」とある。

21 訳者注：鼎のように三本の足を持つ水を受ける盤。

22 訳者注：「呉詠」は呉歌。唐杜甫の「夜左氏の莊に宴す」詩に、「詩罷りて呉詠を聞く、扁舟の意忘れず」とある。

23 訳者注：斐然成章：文才に富み、文章には見るべきものがあること。『論語』公冶長篇に、「子陳に在りて曰く、「歸らんかな帰らんかな、吾が黨の小子は簡簡なり、斐然として成を章す。これを裁する所以を知らざるなり」と」とある。

24 訳者注：「楚聲」はもちろん楚の曲調を指す。『漢書』禮樂志に、「又た「房中祠樂」有り、高祖唐山夫人の作る所なり。周に「房中樂」有り、秦に至りて名づけて「壽人」と曰う。凡そ樂は、其の生まるる所を樂しむは、禮として本を忘れざるなり。高祖は楚聲を樂しむ、故に「房中樂」は楚聲なり」とある。おそらくこの「楚聲」は激越な調子で清への抵抗意識を歌ったものであらう。「賤子も亦た慨然として賦す」とあるのは「賤子」すなわち自分もまた興奮して詩を賦したという意味を含むと思われる。

25 訳者注：「致師」は挑戦の意。古くは春秋左氏傳に用例がある。

26 錢謙益『錢牧齋全集』の『有學集』巻5、213頁。

27 訳者注：蘇州の胥關橋と思われる。

ずるに、朱氏の記載は誤りで、「甲午」に作るべきである]の冬日、牧齋先生其の中に
 僑寓し、山陰の朱朗詣²⁸二十子詩を選び、以て吳越を張り、先生見て歎ず。維の時孤
 館 風悽として、嚴城 柝靜なり、雲巒^{もと}の故に非ざるを恨み、草木の變衰するを悲し
 む。乃ち袁重其に命じて同好を招邀し、斯の堂に會讌す。歩趾して來る者、金子孝章、
 葉子聖野、歸子玄恭、侯子硯德、徐子禎起、陳子鶴客、余を并せて七人と爲す²⁹。

さらに次のように言っている：

[牧齋]先生久しく斷飲するも、是の夕は驩^{よみこ}ぶこと甚だしく、爵を擧ぐる事無算な
 り。余を顧みて言いて曰く、「昔呉中の彦會、祝希哲、文徵仲、唐子畏、王履吉諸
 公³⁰よりも盛んなるは莫く、風流文采、一時を照耀す。今の諸君子は、其れ庶幾き
 か?詩を賦し、以て厥の盛んなるを紀す無かる可けんや?」と。飲み罷りて、其の拈
 韻を重ね、先生首^ま首^ま唱う³¹、「歳晚 顛毛³² 共に余を惜しみ、鐙を明し席を促くし前
 除に坐す。風烟 極目 金虎³³無く、霜露 關心 玉魚³⁴有り。草は綠蕪³⁵に殺れて
 故國を悲しみ、花は紅燭に殘れて靈胥³⁶に感ず。文章は忝竊³⁷せらるるも誠に何をか
 補わん³⁸、慚愧す荒郊に老いて鋤を荷うを³⁹。」翼日、予七人は各の次和すること一首、
 先生再び前韻に疊すこと一首。翼日、予七人又た各の次和すること一首、先生も又た

28 訳者注：朱朗詣については、有學集卷五に「冬夜假我堂文宴有序 贈陳鶴客兼懷朱朗詣用歌真字韻」詩がある。

29 清朱鶴齡撰『愚菴小集』（上海：上海古籍出版社、1979年『清人別集叢刊』上海復旦大學圖書館藏清康熙間刻本に據る影印本）、卷9。頁12a-13b（437-440頁）

30 訳者注：それぞれ、祝允明、文徵明、唐寅、王龍を指す。

31 訳者注：このシリーズ最初の作品「分得魚字二首」の第二首の冒頭である。

32 訳者注：「顛毛」は頭髮を指し、ここでは頭髮が衰えた自分を指すと考える。

33 訳者注：「金虎」は錢曾注に、「陸廣微『吳地記』に、「虎丘山、吳縣の西北九里二歩に在り。『吳越春秋』に、「闔閭虎丘に葬らるるや、十萬人葬を治む。經ること三日、金精化して白虎と爲り其の上に躡る、因りて虎丘と號す」と云う。」とある。

34 訳者注：「玉魚」は、杜甫の「諸將」詩に出てくる。同詩の錢曾注に、「程大昌『續演繁露』に、「杜詩『昨日 玉魚 葬地に蒙^{おぼ}わる」。韋述『兩京記』に、「含元殿成るに、每夜鬼有りて云う、我は是れ漢楚王戊太子なり、此に葬らる。死せる時天子は我に玉魚一雙を斂む。改葬するに果して玉魚を得たり」とあり」とある。

35 訳者注：「綠蕪」は緑の草叢。

36 訳者注：「靈胥」は春秋時代伍子胥を指す。彼は死後に波の神となったので、こう称するという。

37 訳者注：「忝竊」は虚名を得たという謙辞。

38 『有學集』通行本の「冬夜假我堂文宴詩、分ちて魚字を得たり二首」詩其の二のこの句は、「退耕自昔能求士」（退耕 昔自ら能く士を求む）に作る。錢謙益『錢牧齋全集』の『有學集』卷5、215頁に見える。錢仲聯先生は校記を記しておられないので、各本皆同じなのであろう。長孺だけがここでヴァリエントを記録しているのはいよいよ貴重である。字句の異同に従って観察していくと、牧齋の初稿と定稿の違いに表現された牧齋の心情と文章技巧を見て取ることができる。

39 訳者注：晉の陶潛「歸園田居」詩の三、「晨に興きて荒穢を理め、月を帯びて鋤を荷いて歸る。」とあるのに基づくであらう。

人毎ごとに詩一首を贈る。翼日、予七人又た各の次和すること一首。(詩多くは録さず。)先生の詩は幽燕の老将⁴⁰、馬に介⁴¹して堅を衝くが如し。吾輩は乃ち羸師⁴²を以て誘戦せらる、轍亂れ旗靡れざる者有らんや。先生は顧なだ厭いとわずして隋珠⁴³を以て燕石⁴⁴を博し、一章を奏する毎に、輒ち色喜び、復た序つを製りて其の端を弁おどろず。都人は詫おどろきで美談と爲し、事を好むものはこれを剗いた剗⁴⁵に傳う。今に迄りて未だ一紀に及ばざるに、朗詣、聖野、鶴客、硯徳、皆修文を召すに赴き⁴⁶、先生も亦た上つかた箕尾に乘れり⁴⁷。南皮⁴⁸の才彦、半ばは烟雲と化す。臨頓⁴⁹の唱酬、空しく竹樹を存す。後の君子、斯の堂に登る者は、當に必ずや喟然として嘉會の再びなし難きに感有るべし。悲しいかな⁵⁰。

三、請う看よ典午陽秋の例、載記 分明なれば琬琰に垂れん

牧齋の「徐禎起に和す(來韻を用う)」に云う、
 老學依然炳燭時 老學 依然として燭ともを炳ともす時
 杜詩韓筆古人師 杜詩 韓筆 古人の師なり
 崑岡玉石吾何有 崑岡 玉石 吾 何か有らん
 東海滄桑某在斯 東海 滄桑 某は斯に在り
 草野不忘油素約 草野 忘れず油素の約

40 訳者注：宋趙與時『賓退錄』卷二に、「暇日に因りて弟姪の輩と古今諸名人の詩を評す。魏の武帝は幽燕の老将の如く、氣韻沈雄たり」とある。

41 訳者注：「介」は武装させるという意味。

42 訳者注：「羸師」は弱い軍隊。自分たちを卑下している。

43 訳者注：「隋珠」は隋侯の珠。和氏の璧と並び称される珍宝であり、錢牧齋の作品を指す。

44 訳者注：「燕石」は燕山に産する玉に似た石。転じて自分らの作品が凡庸であると謙遜する言葉。

45 訳者注：「剗剗」は版刻すること。

46 訳者注：古くはあの世の著作を司る官職を「修文郎」と称していた。だから「修文」は文人の死を指す。唐杜甫「哭李常侍嶧」詩の一に、「一代風流盡き、修文 地下に深し」とある。

47 訳者注：「莊子」大宗師篇に、「傳説はこれを得て、以て武丁を相け、奄ねく天下を有り、東維に乗り、箕尾に騎り、列星に比ぶ」とあり、傳説は星で、箕星と尾星の間に在り、傳説が死後に天に昇って化したとされる。後に仙人になることを指すようになった。ここではもちろん錢謙益がなくなったことを指す。

48 訳者注：南皮は縣名、今は河北省に属す。漢末建安中に、魏文帝曹丕が五官中郎將であった時、友人の呉質等とそこで詩文の宴會を開き、雉の狩りをしたり、歡を尽くし美談とされた。後に友人たちと雅な宴會を開くという典故となった。『文選』曹丕「朝歌令呉質に與うる書」に、「毎に昔日南皮の遊を念う、誠に忘る可からず」とある。

49 訳者注：蘇州の地名。臨頓里。唐の陸龜蒙の故居があった。

50 清朱鶴齡撰『愚菴小集』卷9。頁12b-13b (438-440頁)

蕉園終見汗青期 蕉園 終に見る汗青の期

請看典午陽秋例 請う看よ典午陽秋の例

載記分明琬琰垂 載記 分明なれば琬琰に垂れん

(時諸君共商史事故及之 時に諸君と共に史事を商す、故にこれに及ぶ⁵¹)。

徐晟禎起については、徐廌(1810-1862)『小腆紀傳』⁵²に記載がある。

徐晟、字は禎起、一字は損之、長洲の諸生。陶潛を以て自ら比し、其の詩に題して『陶菴詩刪』と爲す。魏禧嘗て稱して呉門の隱君子と爲し、其の詩は頓挫沈鬱なり、即い辭未だ工みならざる有るも、必ず稍も矯飾有りて、以て自ら其の性情を害せずと謂う。

『皇明遺民傳』に以下のように云う：

[徐樹丕の] 子晟、字は禎記 [案ずるに當に「起」に作るべし]、一字は損之、亦た長洲の學生なり。悃悞⁵³にして華無く、『陶菴詩刪』有り。嘗て錢謙益と野史を著すを議し、謙益の詩に曰う有り、「請う看よ典午陽秋の例、載記 分明なれば琬琰に垂れん」なる者是なり。魏禧叔子晟の藁に序して曰く、「禎紀 [原注：案ずるに、當に「起」に作るべし] は呉門の隱君子なり、節を執り道を守ること三十年。日び饑寒に困しむも、其の守を變えず。人と忠信篤厚にして、別識⁵⁴甚だ精なり。其の詩は頓挫沈鬱にして、幾んど古人と駕を方ぶ」と。これを讀むに其の人を得るべし。⁵⁵

『蘇州府志』に以下のように云う：

徐樹丕、字は武子、長洲の人。少くして諸生に補せられ、姚希孟これを器重し、妻わすに女を以てす。屢しば試みらるるも利あらず、益ます群籍を博覽す。楷書を善くし、兼ねて八分に工なり。國變の後、隱居して出でず。卒年八十八。著す所『中興綱目』、『識小錄』、『杜詩注』有り。子は晟、字は禎起、博學にして文に工なり。鼎革の時、年甫めて壯なるも、即ち諸生を棄て、父に従いて隱居す。家貧しく、徒を授え親を養うこと四十年に垂んとす。康熙癸亥 [1683]、樹丕歿し、晟も亦た六十六なり。哀毀して疾を得、葬を營むこと甫めて畢りて卒す。著す所『陶園詩集』十二卷、『文集』十卷、『姑蘇續名賢小紀』二卷、『詞』一卷、『家乘識小錄』四卷(楊無咎 [1636-1724] 傳) 有り⁵⁶。

楊鍾義(1865-1940)『雪橋詩話』に「常熟罍里瞿氏四世遺像」の条があり、題詞を

51 錢謙益『錢牧齋全集』の『有學集』卷5、219頁。

52 清徐廌撰『小腆紀傳』(北京：中華書局1958年)、卷58、644頁

53 訳者注：「悃悞」は至誠を意味する。

54 訳者注：「別識」は判断力を指す。

55 謝正光、范金民編『明遺民錄彙輯』(南京：南京大學出版社、1995年)、543頁より引用した。

56 清宋如林等修、清石韞玉纂『蘇州府志』(清道光四年刻本)、卷100、頁3b。

した人の名前を数多く記録しており、「皆遺民なり、詞翰均しく美し」とある。そこに禎起の詩を四首収録して、そのうちの一首は以下の通りである：

遺詩留浩氣 遺詩 浩氣を留め
 有道是江陵 是れ江陵⁵⁷なりと道有り
 歌哭還天地 歌哭 天地に還し^{かえ}
 江山仗友朋 江山 友朋に仗る^よ
 波濤無日靜 波濤 日として靜かなる無く
 喪亂久相仍 喪亂 久しく相い仍く^{つづ}
 回首長安上 首を回らす長安の上
 蒼梧隔萬層 蒼梧 萬層を隔つ⁵⁸

これは忠義を以て回天の事業に殉じた人瞿式耜（稼軒、1590-1651）を讃えた詩であり、遺民の言葉遣いそのものである。

牧齋の『有學集』にある「徐禎起に答うるの書」⁵⁹の冒頭はこう始まっている：

示される所の古文を讀むに、數篇ならずして、輒ちに掌を拊き^な 60 太息す。文は皆奇麗にして、志節は盤鬱たり、方寸の五嶽は、隱然として平らかならず。而して辨博の學、雄駿の氣、又た以てこれを發するに足る。眼中の人此れ無きこと久しきなり。足下は通懷⁶¹ するも挹損⁶² にして、諄複⁶³ として下問す。老學は昏耄にして、未だ以て相い長ずること⁶⁴ 有らず。

假我堂の詩文の会の後、牧齋は徐禎起に芙蓉荘の家塾で教授をするように要請しており⁶⁵、牧齋が徐禎起を尊重していたことが見て取れる。徐禎起には『存友札小引』という著書がある。彼が所蔵する友人の書簡に小伝を付したり、あるいはその友人との因縁を記したりしたものであり、「志友」、「尚友」、「文節」、「憶心」の四篇に分かれている。「尚友」篇の中に「錢宗伯牧齋（謙益）」の条があり、假我堂での詩文の会を回想してお

57 訳者注：「江陵」は建安二十四年（219）に起こった江陵の戦いを指すと思われる。呉の將軍呂蒙が蜀の將軍關羽の背後を急襲し、敗北した關羽は逃亡して捕虜になり、殺された。この状況を清の順治初年に永曆帝を擁護して桂林で清軍と戦い捕虜になり、帰順を拒否して殺された瞿式耜と重ね合わせているのであろう。

58 楊鍾義撰集、劉承幹參校、『雪橋詩話餘集』（北京：北京古籍出版社、1992年）、卷1、11-12頁。

59 錢謙益『牧齋全集』の『有學集』卷39、1354頁。

60 訳者注：「掌を拊き」は拍手するという意味。

61 訳者注：「通懷」は互いの心情を通わせること。

62 訳者注：「挹損」は謙遜な様。

63 訳者注：「諄複」は反復して詳細にの意味。

64 訳者注：「相い長ずる」は互いに成長する。あるいは相手を成長させるという意味。

65 方良『錢謙益年譜』（北京中國書籍出版社2012年）270頁を参照のこと。

り、「〔牧齋〕書に於いて窺^{うかが}わざる所無し。曾て予を招きて淥水園に飲せしめ、本朝の典故を譚じ、娓娓として名實に中る。衆人中に於いて以て予に目視し⁶⁶、後に人に稱して云う、「某は才あり」と。芙蓉莊に招致して、子婿に命じて北を執りて禮せしむ⁶⁷」と述べている⁶⁸。

牧齋は「徐禎起に和す」詩の後に自注を書いて、「時に諸君と共に史事^{そうだん}を商す、故にこれに及ぶ。」とある。この「史事」が何を指すか、資料が足らず、確定するのは難しいが、『皇明遺民傳』徐晟傳に、「嘗て錢謙益と野史を著わすを議し、謙益詩有りて、『請う看よ典午陽秋の例、載記 分明なれば琬琰に垂れん』と曰う者はれなり。」とある。この「史事」が「野史」を指すかどうかは、牧齋の詩の意味に照らして吟味すると、成立しないでもない。もしもこれが本当に私家版の野史を指すとすれば、その内容はおそらく明清交替期の史実に違いない。以下試みに論じていこう。

詩の首聯は、「老學 依然として燭を炳^{とも}す時、杜詩 韓筆 古人の師なり」である。牧齋は自らが老いてなお学を好み、古の詩文の正統に則っているため、古の賢人に学んでいるため、世人から受け入れられない、と述べる。頷聯は、「崑岡 玉石 吾 何か有らん、東海 滄桑 某は斯に在り」である。假我堂での詩文の会において、参集した人々は牧齋を師と仰ぎ、牧齋は自分の年は最年長だが、学才には恵まれないと謙遜している。「東海 滄桑」というのは自分が歴史の証人 (a historical witness) であるという意味である。晋葛洪『神仙傳』王遠に、「麻姑自ら説いて云う、「接待して以來、已に東海の三たび桑田と爲るを見る、向に蓬萊に到るに、又た水は往者に會いし時よりも淺きこと略ぼ半ばなるのみ、豈に將た復た陵陸と爲らんとするか！」と。嘆いて曰く、「聖人皆言う、海中行復た塵揚がるなり」と。」⁶⁹とあり、牧齋はこの典故を用いるが、「桑田滄海」の感慨や嘆息を込める以外に、世情の変化と、国家滅亡という大変動を喩えているのである。

頸聯には「草野 忘れず油素の約、蕉園 終に見る汗青の期」とある。「油素の約」とは、参加者と牧齋の約束であるかもしれないし、参加者相互間の約束かもしれない。

66 訳者注：「目視」は目くばせをすること。『漢書』李陵傳に、「立政等陵を見るも、未だ私語するを得ず、即ち陵に目視し、數數たび自ら其の刀環を循で、其の足を握り、陰かにこれに論し、漢に還歸す可しと謂う」とあり、顔師古の注に「目を以て相い視てこれを感じせしむ、今の俗に謂う所の眼語なる者なり」とある。

67 訳者注：「北を執りて禮せしむ」は「執北面禮」といった意味であろう。

68 清徐晟撰『存友札小引』（上海、上海書店、1994年『叢書集成續編』集部第155冊）頁6a（331頁）。

69 宋李昉等撰『太平廣記』（臺北：臺灣商務印書館、1983年文淵閣『四庫全書』、第1043-1046冊）卷7、頁5b-6a。

どちらにせよ、心情や志を同じくする者の誠意がこの表現に溢れているのではないか。「油素」は白絹の布である。漢揚雄「劉歆に答うるの書」に以下のように云う、「故に天下の上計⁷⁰、孝廉及び内郡衛卒の會する者あらば、雄は常に三寸の弱翰を把ち、油素四尺を齋ち、以て其の異語を問ひ、歸らば即ちに鉛摘⁷¹を以てこれを槩⁷²に次べ、今に於いて二十七歳なり。」⁷³牧齋はこの典故を使って彼らは「草野」⁷⁴（在野）に在り、それが彼らの職責ではないのに、懸命に著作に従事していることを喩えている。「蕉園」とは、「芭蕉園」であり、北京の太液池の東にあった。『太祖実録』が完成すると、草稿はここで燃やされた⁷⁵。このことから判断すると、参加者とかかわした「油素の約」とは、明代の歴史書にかかわることは明らかである。「終に見る汗青の期」云々の典故は、唐劉知幾『史通』忤時篇から出ているが、意味を転倒させて使っている。知幾は言う、「一事を記し一言を載せんと欲する毎に、皆な筆を闇きて相い視、毫を含みて斷たず。故に白首期す可くして、汗青は日無し。」⁷⁶知幾のこの言葉は、史館の修史官について発せられており、彼らがあまりにも慎重で、著述に主体性がなく、たがいに責任を押し付けあうため、髪が真っ白になっても史書は完成の見込みがないと風刺している。牧齋がこの典故を使った含みはかなり奥深い。宴会の参加者に、心を合わせて努力すれば、著述は必ずや完成すると励ましているのが一つ。このように世の中が激変しているため、官僚組織は崩壊し、官史（official history）には期待できない。だから在野の人士が著す「野史」や「私史」（private history）こそ貴重であるというのが二つめの含意である。さらに、牧齋は劉知幾が鼓吹していた「一家獨斷」⁷⁷の学にもともと賛同していたのである。

この詩の末聯には、「請う看よ典午陽秋の例、載記 分明なれば琬琰に垂れん」とある。これこそ上述した南九萬が引用した牧齋の詩聯である。この聯の含意は非常に深く複雑である。

「典午」について、錢曾（遵王、1629-1701）の注は『三國志』蜀志「案ずるに「書」に作るべきである」譙周傳を引く、「咸熙二年夏、巴郡の文立、洛陽従り蜀に還り、過

70 訳者注：「上計」とは漢代地方官が下役を中央に派遣して、一年の報告をすることをいう。

71 訳者注：「鉛摘」は筆録を指す。

72 訳者注：木を削って作った札を指す。

73 漢揚雄撰、晉郭璞注『方言』（文淵閣『四庫全書』第221冊）、巻13、頁30b。

74 訳者注：「草野」は在野を指す。

75 明沈德符著、黎欣點校『萬曆野獲編』（北京、文化藝術出版社1998年）補遺巻1、859頁「今上史學」の条を参照のこと。

76 唐劉知幾撰『史通』（文淵閣『四庫全書』第685冊）、巻20、頁13a。

77 訳者注：「一家獨斷」は、私人の著した歴史書は、官撰の歴史書より権力者の干渉を排除することができる点で優れているという説。

りて周に見ゆ。周は語次に、書板⁷⁸に因りて立に示して曰く、「典午^{ほろ}忽びん、月酉に没せん」と。典午は、司馬を謂うなり、月酉は、八月を謂うなり。八月に至りて文王果たして崩す。」⁷⁹『陽秋』について、遵王は『晉書』孫盛傳を引用する、「盛は篤學にして倦まず、少き自り老いに至るまで、手より卷を釋さず。『魏氏春秋』、『晉陽秋』を著し、並びに詩賦論難復た數十篇を造る。『晉陽秋』は詞直にして理正しく、咸な良史と稱す。既にして桓温これを見、怒りて盛の子に謂いて曰く、「枋頭⁸⁰誠に利を失うと爲す、何ぞ乃ち尊君の説く所の如きに至らんや！若し此の史遂に行われれば、是れ自り君の門戸の事を關さん」と。其の子遽に拜謝し、「請うこれを刪改せん」と謂う。時に盛は年老い家に還り、性は方に厳しくして軌憲有り、子孫班白すると雖も、庭訓愈よ峻し。此れに至りて諸子乃ち共に號泣稽顙し、百口の爲に切に計れと請う。盛大いに怒る。諸子遂爾にこれを改む。盛は兩定本を寫し、慕容儁に寄す。太元中、孝武帝博く異聞を求め、始めて遼東に於いてこれを得て、以て相い考校するに、多く同じからざる有り、書遂りて兩つながら存す。」「琬琰」については、遵王の注は『後漢書』竇融傳の「〔竇融傳論〕東方朔は「これを用うれば則ち虎と爲り、用いざれば則ち鼠と爲る」と稱す、信なるかな。此れを以てこれを言わば、士琬琰を懷きて以て煨塵⁸¹に就く有る者は、亦た何ぞ支う可けんや。」を引く。

遵王のこの聯に対する注は、一見したところ妥当性を欠いてはいないのだが、牧齋の詩はもともと自注にあった「時に諸君と共に史事^{そうだん}を商す」から発想されている。孫盛は『晉陽秋』を著し、書名は「典午陽秋」の意味を含み、その書は「詞直にして理正しく、咸な良史と稱す」と称賛されていて、牧齋の詩旨に合致しており、彼はこれを借りて宴会の参加者たちに優れた歴史書を共に著わそうと呼び掛けているともとれる。しかしこの詩の内容に即して深く考えると、遵王のこの解釈は隔靴搔痒の感がある。事実を突き詰めてゆくと、「典午陽秋」とは、『晉陽秋』を指すのではなく、載記三十巻を備えた『晉書』を指すのである。このように理解すれば、聯の中の「典午」、「陽秋」、「載記」といった言葉が落ち着くし、意味もようやく明確になるのである。以下の議論をご覧あれ。

「典午」は「司馬」の隠語である。晉の皇帝の姓は司馬であり、後に「典午」で晉朝を指すようになった。先に引用した『三國志』蜀書譙周傳以外に、『晉書』が安帝・恭

78 訳者注：「書板」は字を書きつける板。

79 遵王の本詩に対する注はすべて錢謙益の『錢牧齋全集』の『有學集』巻5、219頁に見える。遵王の注の引用で抜け落ちたり、簡略すぎるころは、必要に応じて補足したが、特に説明は加えなかった、以下同じ。

80 訳者注：太和四年（369）、桓温が北伐の際に枋頭で喫した大敗を指す。

81 訳者注：「灰燼」は塵埃であり、亦た卑賤な境地を喩える。

帝を論じて、「是を以て宋高は典午の臣に非ず、孫恩は豈に金行の寇ならんや」⁸²といているが、これもその用例である。明胡應麟（1551-1602）『少室山房筆叢』史書佔畢四に、「當塗は魏爲り、典午は晉爲り、世は率ねこれを知るも、意義出處、或いは明了ならず。按ずるに、未だ明了ならず。按ずるに……典は司なり；午は馬なり」とある⁸³。

「陽秋」は孔子の著『春秋』であり、晉代に簡文帝の母鄭皇后阿春の諱を避けるために「春」を「陽」に改めたのである。『晉書』褚裒傳に、「譙國桓彝見てこれを目して曰く、「季野には皮裏陽秋有り」と。其の外には臧否無く、内には褒貶する所有るを言うなり」とある⁸⁴。牧齋「吉水の李文孫に與うるの書」にも亦た、「行狀を循覽するに、文は直にして事は覈なり、大いに定哀の微詞を闡らかにし、一えに陽秋の曲筆を洗う、幸いなるかな。」とある⁸⁵。牧齋の同時代人孫枝蔚（1620-1687）の「廣化寺にて忠烈祠に謁し吳梅村の韻（丙申）に歩む」詩に、「何人か直筆もて陽秋を擅らにするや、惜しむ可し 清流 濁流に葬らるる」とある⁸⁶。これらすべてはその用例である。

「載記」はこの聯のキーワードであるが、遵王は注をつけていない。古い時代の歴史書は、国号は建てたが、正統な王朝でない者の伝記を「載記」と称し、本紀や列伝と区別した。たとえば『後漢書』班固傳上に、「固は又た功臣、平林、新市、公孫述の事をの撰べ、列伝、載記二十八篇を作り、これを奏す」とある⁸⁷。『晉書』の状況は牧齋のこの聯を解釈するにあたり、最も重要である。『晉書』には「載記」三十巻があり、五胡をそこに含めており、史臣は「北狄の竊みぶんふそうおうに中壤と號するは、「載記」に備う…」と述べている⁸⁸。清趙翼（1727-1814）の『二十二史劄記』には、「『晉書』僭諸國の數代相い傳う者は、世家と曰わず、載記と曰う」と書いている⁸⁹。これらから判断すると、牧齋の詩句の中の「載記」という一語は、汎用の「載記」ではなく、『晉書』の書法、体例、歴史著述の深意に即して述べているのである。

まとめると、この聯は牧齋が宴会に参加した人々に対し、懇切に要請している言葉である。明清交代期の歴史を編纂・記述する時には、『春秋』の華夷の区別を守り、明を

82 唐房玄齡等撰『晉書』恭帝紀（北京、中華書局1974年）、巻10、270頁。

83 明胡應麟撰『少室山房筆叢』（文淵閣『四庫全書』第886冊）、正集、巻8、頁6a-b。

84 『晉書』褚裒傳、巻93、2415頁。

85 錢謙益『錢牧齋全集』の『有學集』巻38、1330頁。

86 清孫枝蔚『澹堂前集』（上海、上海古籍出版社、2010年『清代詩文彙編』、第71冊、清康熙六十年〔1721〕増刻本に據る影印本）、巻7、頁10b（404頁）。

87 南朝宋范曄撰『後漢書』班固傳上（北京、中華書局、1965年）、巻40上、1334頁。

88 『晉書』四夷、巻97、2532頁。

89 清趙翼撰『廿二史劄記』（北京、中華書局、1985年）、巻1、4頁。

尊び、清を排斥することに努め、『晉書』が「北狄」を処理した書法と義例を継承し、褒貶をその文章に込めよと彼らに依頼しているのである。これこそ牧齋が詩序の中で言及している「管室の陽秋、烏索を鐫除す」の深意に外ならない。さらに、遵王が「士琬琰を懐きて以て煨塵に就く者有り」⁹⁰云々を「琬琰」二文字の注として引用しているのは無駄であり、意味がない。「琬琰」とは、琬圭・琰圭のことであり、それを借用して碑石の美称とする。唐玄宗「孝經序」に、「これを琬琰に^か書き、^{ねが}庶わくは將來に補う有らんことを」がその例である⁹¹。先に論じたことと合わせると、牧齋のこの聯の下句は、「『晉書』の「載記」の範例は、堅実で気塊に満ちた古碑のように、義理は正しく筋目も通っており、永久に不滅で、模範とすべきであり、諸君は歴史著述をする際にはこれに従わねばならない」このように解釈できるのではないだろうか。

四、知る君の王哀の傳を讀むを恥ずるを、但だ生徒をして蓼莪を廢せしのみ

牧齋の「侯研徳に簡し並びに記原に示す（歌字の韻を用う）」詩は、次のように云う：

當饗休聽暇豫歌 饗に當りては聽くこと休かれ暇豫の歌

破巢完卵爲銅駝 破れし巢に卵完きは銅駝の爲なり

國殤何意存三戸 國殤 何の意ありて三戸を存するや

家祭無忘告兩河 家祭 忘ること無かれ兩河を告ぐるを

擊筑淚從天北至 筑を撃ちて涙は天北従り至り

吹簫聲向日南多 簫を吹きて聲は日南に向うこと多し

知君恥讀王哀傳 知る君は王哀の傳を讀むを恥ずるを

但使生徒廢蓼莪 （訳者注：王哀）但だ生徒をして蓼莪を廢せしのみ

箋曰、嘉定侯公峒曾、字曰廣成、以提學分守家居。弘光時、召爲左通政、不赴。乙酉五月、南都失守。六月、李成棟掠地吳下。公與同邑進士黃淳耀蘊生聚兵堅守、邀成棟而擊之、一敗之于羅店、再敗之于倉橋。成棟恚甚、益修攻具。圍急、城中矢盡。七月三日、大雨、城崩一角。四日、雨益澍、城遂陷、公從容赴池水死。黃公與弟淵耀相對同縊于僧舍。

箋に曰く、嘉定の侯公峒曾、字は廣成と曰い、提學分守を以て家居す。弘光の時、召されて左通政と爲るも、赴かず。乙酉五月、南都守を失う。六月、李成棟地を吳下に

90 訳者注：錢曾が引いているのは『後漢書』卷53竇憲傳論である。

91 唐玄宗「孝經序」。唐玄宗御注、唐陸德明音義、宋邢昺疏『孝經注疏』（『四庫全書』、第182冊）頁13bに見える。

掠す。公は同邑の進士黃淳耀蘊生と與に兵を聚めて堅守し、成棟を邀えてこれを撃ち、一たびこれを羅店に敗り、再びこれを倉橋いしかに敗る。成棟恚ること甚しく、益ます攻具を修む。圍むこと急にして、城中矢盡く。七月三日、大雨あり、城の一角崩る。四日、雨益ます澇り、城遂に陥ち、公は從容として池水に赴きて死す。黄公は弟淵耀と相對して共に僧舎に縊す。⁹²

乙酉（1645）夏、明清最後の攻防戦が展開された。清は軍を南下させ、長江を渡り、南京の弘光朝は瞬時に瓦解した。牧齋の友人侯峒曾と黃淳耀（1606-1645）は決起して嘉定を守備し、町が陥落すると自殺した。

侯峒曾は号は廣成、字は豫瞻。明の贈太常少卿侯震暘の長子であり、天啓五年（1625）の進士であった。平生から詩文を好み、書法に長じていた。嘗て浙江參政となったことがある。嘉定の人々が奮起して清に抵抗した際、侯峒曾と黃淳耀はその頭目となり、閏六月十七日、義勇軍を立ち上げて町を守備し、堅守十日余り、七月四日に町が陥落した。町が陥落した時、二人は投水して国に殉じた⁹³。侯峒曾の弟岐曾は、字は雍瞻、國子監生で、文学と徳行において峒曾と名を等しくし、後に義勇軍を挙げて清に抵抗した陳子龍を匿ったため逮捕され、屈することなく殺害された。

黃宗羲（1610-1695）著『弘光實錄鈔』にある嘉定陥落の際の記事に以下のような記載がある。

士卒皆曰く、「吾曹われわれは公の厚恩を受く、尚お公を衛りて出走せんとす」と。峒曾曰く、「城と存亡するは義なり」と。已にして水に赴きて死す。子玄演・玄潔従いて死す。又た、城破るの際、黃淳耀・淵輝兄弟は西方庵に避匿す。淳耀其の從者に問いて曰く、「侯公いかんは何若？」と。曰く、「死せり！」と。曰く、「吾れ侯公と事を同にす、義として獨り生きず」と。乃ち壁に書して曰く、「書を讀むも益寡すくなし、道を學ぶも成ること無し。進みては力を王朝にあ宣げるを得ず、退きては潔身遠引すること能わず、耿耿として没せざるは、此の心のみ。大明の遺臣黃淳耀城西の僧舎に自裁せんとす」と。淵耀曰く、「兄は王臣爲り宜しく死すべし、然れども弟も亦た□□（北虜）の民と爲るを願わざるなり」と。是に於いて淳耀は西いに縊し、淵耀は西に縊し、共に節義に殉ず⁹⁴。

92 錢謙益、『錢牧齋全集』の『有學集』、卷5、220頁。

93 嘉定の防衛戦については、峒曾の弟岐曾の日記に詳しい。清侯岐曾著、王貽樞、曹大民校點『侯岐曾日記（丙戌丁亥）』を参照のこと。なお本書は劉永翔等が整理した『明清上海稀見文獻五種』（北京、人民文學出版社、2006年）に収められている。477-642頁。

94 訳者注：この部分は嚴氏が『弘光實錄鈔』の記事を節録したものである。以下原注：清黃宗羲『弘光實錄鈔』（上海、上海古籍出版社、1995年『續修四庫全書』史部、第367冊、浙江圖書館藏

「嘉定三屠」では多数の死者が出て、庶民は塗炭の苦しみを味わい、その事蹟の酷さは現在にまで伝わっている。

牧齋が詩を贈った侯研徳は侯峒曾の弟岐曾の子で、初名は玄泓、又の名を玄涵、号は掌亭であった。諸生で、門人はその死後に「貞憲先生」と諡し、著書に『掌亭集』がある。詩題はさらに「記原」に言及しているが、これは侯玄汭の字で、甲寅再來人、月蟬、潛確、秬園と号し、やはり岐曾の子である。記原は長兄で、研徳は末弟であった。

黄容『明遺民録』卷八「侯泓」の条に次のように言っている：

侯泓、字は研徳、名を涵と更め、自ら掌亭と號す、嘉定の人。父は岐曾、盛名を負い、四方の賢公卿より諸名士に詎るまで門に造り堂に登る者、日夜瀾ちて絶えず、一見すれば輒ち呼びて小友と爲す。後に伯通政峒曾暨び太常後先して國に殉じ、家難迭がわるる至り、又た兄の子殤するに遭い、哀しみ過き時血を嘔きて没す、年四十五⁹⁵。

『皇明遺民傳』卷四「侯泓」の条に次のようにある：

其の（侯汭）弟泓、字研徳、後に其の字を更めて中徳と曰う。早に患難に嬰い、流離して恒居無し。久しくして後嘉定の村に返り、經史を討論して以て終わる、年は四十。……錢謙益嘗て泓に詩を贈りて曰く、「知る君は王哀の傳を読むを恥ずるを、但だ生徒をして蓼莪を廢せしのみ」と。此れを読まば泓を知るべきなり⁹⁶。

牧齋と侯氏の一門は二代にわたって交誼があり、研徳とは師弟関係（詳細は後に引く歸莊の文参照）にあった。清初の古文の大家汪琬（1624-1691）は侯氏の一族について健筆を揮っており、「侯峒曾傳」、「侯岐曾傳」、「侯記原墓誌銘」等がある。「侯記原墓誌銘」の銘に次のように云う：

侯之門兮忠且義 侯の門や 忠にして且つ義あり
 保孤難兮殺身易 孤を保つは難く 身を殺すは易し
 君九死兮心彌慰 君は九死して 心は彌いよ慰む
 極飄泊兮天之涯 飄泊を極めて 天の涯にあり
 茹荼槩兮甘如飴 荼槩を茹べて 甘きこと飴の如し
 幸生全兮返故栖 幸いに生全くして 故栖に戻る
 君之兩父兮翔正氣 君の兩父 正氣翔け
 薄雲與日兮摩天際 雲と日に薄りて 天際を摩す
 今往從之兮 今往きてこれに従わば

清光緒三年 [1877] 傅氏長恩閣抄本に據る影印本)、卷4、頁19a-b、(414頁)。

95 謝正光、范金民編『明遺民録彙輯』437頁から引用した。

96 同前注、438頁。

其可以無愧 其れ以て愧ずること無かる可し⁹⁷

この文章の中で語られている、侯氏の両家の生き残った子弟の物語は、かなり曲折に満ち、不可思議であり、縁あらば日を改めて論じてみたい。この銘文と牧齋の詩を合わせ読めば、侯家の忠義と侯氏の孤児たちの苦勞の一斑が見て取れる。

詩箋が言及している黄淳耀もまた牧齋の旧友であった。牧齋『有學集』には、「黃陶菴先生全集序」が収められている。その中に、

嘉定の黃陶菴先生、諱は淳耀、字は蘊生、崇禎癸未進士に擧げられ、卓然として命世の眞儒爲り。抗節にして命を乙酉の難に致し、聞く者皆色を斂め容を正し、以て今の顔清臣文履善と爲す。歿後十餘年にして、其の徒侯子玄泓行狀つくりを作爲り、文は直にして事は核、良史に愧ずる無し⁹⁸。

とある。

淳耀はかつて牧齋の家塾の師であったため、二人は尊敬しあう親友であった。

康熙七年(1668)、歸莊(玄恭、1613-1673)は研徳のために「侯研徳文集序」を書いた。時に研徳の没後四年が経過していた：

研徳わか少き時、才情は綺麗にして、錦心繡腸なり。然るに嘉定の文派は、故宗太僕〔歸有光〕にして、虞山錢宗伯は則ち太僕の功臣なり。研徳は郷里先哲の訓を漸摩し、又た虞山の教を奉り、遂に不難やすやすと春華を斂めて秋實と爲し、永嘉を變じて正始と爲す。……其の詩は少き自り長ずるに至り、亦た一格ならず、變わる毎に益ます工なり。……國家喪亂の際、俯仰すべて傷懷にして、讀む者既に其の辭の工なるを歎じ、又た其の志を悲しむ⁹⁹。

さらに次のように言っている：

研徳は中年に道を學び、諸事灑脱なれども、其の詩文に自ら叙し、始末異同の故を詳述し、猶お後世の名を忘るること能わざるなり¹⁰⁰。

以下牧齋の「侯研徳に簡し並びに記原に示す」詩を論じていこう。

詩の首聯は、「饗に當りては聽くこと休かれ暇豫の歌、破巢にて卵完うするは銅駝の爲なり」である。「饗に當たる」とは盛大な宴会を開き客をもてなすこと。遵王の注は『國語』晉語二を引用する。「優施 里克の酒を飲む、中飲にて、優施起ちて舞い、里克

97 清汪琬著、李聖華箋校、『汪琬全集箋校』（北京、人民文学出版社、2010年）、1609頁。

98 錢謙益『錢牧齋全集』の『有學集』卷16、740頁。

99 清歸莊著、『歸莊集』（上海、上海古籍出版社、1984年）卷3、215頁。

100 同前注。

の妻に謂いて曰く、「主孟我を^{くわ}陥^せよ、我子^{われし}¹⁰¹に暇豫の君に事うるを教えんとす」と。乃ち歌いて曰く、「暇豫して吾吾たるは¹⁰²、鳥鳥に如かず。皆苑に集まるに、己は獨り枯に集う」と。」韋昭の注は、「暇は閑なり。豫は樂なり。」となっている¹⁰³。「暇豫歌」とは優施が歌った「暇豫の吾吾たる」という数語である。遵王のこの注は、字面の意味を解釈するだけで、さらに深く追求しなければならない。実は、優施が「暇豫」を歌った話は、『國語』晉語二に載っている「驪姫譜いて太子申生を殺す」の条にあり、ここではその前後の重要な一段を引用する：

襪桑自り反り、處ること五年、驪姫公に謂いて曰く、「吾れ申生の謀愈いよ深し」と聞く。日に吾れ固より君に告げて曰く、「衆を得ん」と。衆利とせざれば、焉んぞ能く翟に勝たんや？今翟の善を^{ほこ}矜^りて、其の志益す廣し。狐突順とせざれば、故に出でず。吾これを聞く、「申生は甚だ信を好みて^{つよ}彊^く、又た衆に失言せり」と。退く有らんと欲すると雖も、衆將にこれを責めんとす。言は食す可からず、衆は^{とど}弭^む可からず。是を以て深く謀るなり。君若し圖らざれば、難將に至らんとす！」と。公曰く、「吾忘れざるなり。抑そも未だ以て罪を致す有らず」と。

驪姫 優施に告げて曰く、「君既に我に太子を殺して奚齊を立つるを許す。吾里克^{はばか}を難^し、奈何せん？」と。優施曰く、「吾里克を來くこと、一日のみ。子我が爲に特羊の饗を具えよ。吾れ以てこれに従いて酒を飲ましめん。我は優なり、言えども^{とが}郵無からん」と。驪姫許諾し、乃ち具え、優施をして里克に酒を飲ましむ。中飲にして、優施起ちて舞い、里克の妻に謂いて曰く、「主孟我に^{くわ}陥^せよ、我茲に暇豫して君に事うるを教えん」と。乃ち歌いて曰く、「暇豫して吾吾たるは、鳥鳥に如かず。人皆苑に集れるに、己れ獨り枯に集る」と。里克笑いて曰く、「何をか苑と謂うや？何をか枯と謂うや？」と。優施曰く、「其の母は夫人と爲り、其の子は君と爲る、苑と謂わざる可けんや？其の母既に死し、其の子も又た^と謗^{有り}、枯と謂わざる可けんや？枯れて且つ傷有り」と。

優施出づ、里克奠^きを^{そん}辟^しり、殮せずして寝ぬ。夜半、優施を召して曰く、「^{さき}囊^に而の言戯るるか？抑そもこれを聞く所有るや？」と。曰く、「然り。君既に驪姫に太子を殺して奚齊を立つるを許せり、謀既に成る」と。里克曰く、「吾君を^と乘^りて以て太子を殺すは、吾れ忍びず。通じて復た^{こと}故^{さら}に交るは、吾れ敢てせず。中立せんとすれ

101 訳者注：原文のまま。『國語』晉語二は「茲」に作る。「茲に」と読まれるはずである。

102 訳者注：「吾吾」は疎遠なさま。

103 遵王のこの詩に対する注は、錢謙益『錢牧齋全集』の『有學集』巻5、220-221頁に見える。

ば其れ免れんか？」と。優施曰く、「免れん」と¹⁰⁴。

要約すると、驪姫は太子の申生を殺せようとし、里克が阻止するのを恐れ、優施に相談した。優施は宴会の際中に「暇豫して君に事う」かについて歌で言及したが、これは謎かけであった。同時にこの国に太子を廃立しようとするクー・デタが起こるであろうと仄めかし、その反応を探ったのであった。宴会の後、里克は寝付かれず、急に優施を呼びつけ、君主の意思に沿って太子を殺すのには忍びず、その企てについて知らぬ存ぜぬをきめこむのも、太子との旧交を考えれば不可能であるから、「中立」策でこの局面に対処したいと告げた。韋昭の注に、「中立とは、君に阿せず、亦た太子をも助けず」¹⁰⁵とある。前の「暇豫」と「中立」を対照させて読むことにより、始めて当時の里克が置かれていた困難な状況を理解できるのだ。

この聯の下の句は「破れし巢に卵完きは銅駝の爲なり」である。「破れし巢に卵完き」は「覆巢の下完卵無し」をひねった言い方である。『世説新語』言語篇には、「孔融收め被れるや、……使者に謂いて曰く、「冀わくは罪は身に止まらんことを、二兒全きを得可きや不や？」と。兒徐ろに進みて曰く、「大人、豈に覆巢の下完卵有るを見んや？」と。尋いで亦た收至る。」¹⁰⁶とある。「銅駝」は、都や宮廷を比喻する。『晉書』索靖傳に次のような記事が載せられている、「靖に先識遠量有り、天下の將に亂れんとするを知り、洛陽の宮門の銅駝を指し、歎きて曰く、「會に汝の荆曲中に在るを見るべきのみ！」と」¹⁰⁷。

以上のことから判断すると、牧齋のこの詩は、研徳・記原の兄弟に示したもので、この句の本意は極めて明白に提示されている。すなわち、「嘉定三屠」及びその後の反清活動で、侯家の人物は悲惨な最期を遂げ、研徳・記原は幸いにも生き残った。それは国家のために有用な人材を残そうとする天の配剤だったのである。下の句から上の句に遡って考察すると、上の句は牧齋が研徳・記原兄弟に対して、この乱れた世の中において、「暇豫」の心を持ってはならない、「中立」を保とうなどと考えるはいけなく、と呼びかけていることになる。

この聯と頷聯を合わせ見れば、先の議論はさらに明確になる。頷聯は「國瘍 何の意ありて三戸を存するや、家祭 忘るる無かれ兩河を告ぐるを」である。「國瘍」は、『楚

104 吳韋昭注、『國語』晉語二、(文淵閣『四庫全書』、第406冊)、卷8、頁1a-2b。

105 同前注、頁2b。

106 南朝宋劉義慶撰、梁劉孝標注、『世説新語』(文淵閣『四庫全書』第1035冊)、卷上の上、頁21b。

107 『晉書』索靖傳、卷60、1648頁。

辭』九歌・國殤の王逸注に、「國事に死する者を謂う」とある¹⁰⁸。この「國殤」の意味は、句の中の「三戸」の典故と融合している。『史記』項羽本紀には、「……故に楚の南公曰く、「楚は三戸と雖も、秦を亡ぼすは必ずや楚ならん」と。」『集解』は、瓚を引いて、「楚人は秦を怨む、三戸と雖も猶お以て秦を亡ぼすに足る。」¹⁰⁹と述べている。侯峒曾には三子あった。玄演、玄潔、玄澹である。嘉定の虐殺で、玄演と玄潔は亡くなり、玄澹は生きながらえた。侯岐曾にも三子あった。玄沔（記原）、玄洵、玄泓（研徳）である。記原と研徳はかろうじて生き延びた。天地が崩壊した後、幸いにも侯氏にはちょうど「三戸」が残された。牧齋の詩句はまさに恐るべき切れ味を示している。（災難の後三年にして玄澹は亡くなり、子息がいなかったので、記原は長男にその後を継がせた。）では「國殤 何の意ありて三戸を存するや」とは何を意味するのか？牧齋は「秦/清」を滅ぼすのは必ず「侯」氏だと考えているのではないか？これは本聯の下の句と合わせ見ると、更にはっきりしてくる。「家祭 忘る無かれ兩河を告ぐるを」はもちろん陸游の有名な詩「兒に示す」を踏まえている。

死去元知萬事空 死し去らば元もと知る萬事空しと
但悲不見九州同 但だ悲しむ九州の同じきを見ざるを
王師北定中原日 王師 北のかた中原を定むる日
家祭無忘告乃翁 家祭には忘ること無かれ乃翁に告ぐるを¹¹⁰

遼王のこの詩の注は、さらに『宋史』宗澤傳の記載を挙げている。「澤憂憤し、疽は背に發するも、一語も家事に及ぶ無く、但だ河を過せと呼ぶこと三たびにして卒す。」¹¹¹遼王のこの注は的確である。南宋の名將宗澤は、岳飛を重用して北伐を行い、高宗に何度も遷都して開封に帰還するよう要請したが、後に金軍を撃破できなかったため、憂憤のため亡くなった。牧齋のこの句は、陸游の原作の「乃翁」を「兩河」に変えている。宋代には河北・河東の兩地区を「兩河」と呼んでいた。陸游の「感憤」には「四海 一家なるは天の歴數にして、兩河百郡 宋の山川なり」¹¹²とあるので、「兩河」は大宋の江山を指すに違いない。牧齋の句「兩河を告げよ」云々とは、研徳が祖先の祭りを行う際には、「乃翁」（訳者注：汝の父、すなわち侯岐曾を指す）に王師はすでに中原を回復し、

108 宋洪興祖『楚辭補注』（文淵閣『四庫全書』、第1062冊）卷2、頁31a。

109 漢司馬遷撰著、宋裴駟集解、唐司馬貞索隱、唐張守節正義、『史記』項羽本紀（北京、中華書局、1959年）卷7、300-301頁。

110 宋陸游撰『劍南詩藁』（文淵閣『四庫全書』第1162-1163冊）、卷85、頁12a。

111 錢謙益『錢牧齋全集』の『有學集』卷5、220-221頁。

112 陸游撰『劍南詩藁』卷16、頁4b。

「九州は同じく」なり、明室は復興したと報告せよと述べているように思われる¹¹³。牧齋のこの二つの聯は、まさに戦慄すべき内容と言えよう。

頸聯に云う、「筑を撃ちて涙は天北従り至り、簫を吹きて聲は日南に向うこと多し。」牧齋のこの詩にはゆるんだ箇所がない。この聯はその前の聯を受けて転じ、少し離れているとはいえ、なおも以前の四句と関連している。「筑を撃ちて」について言えば、筑は叩いて歌唱に合わせる楽器であり、ここでは荊軻による秦王暗殺の典故を用いている。『戦國策』燕策に、太子丹が荊軻を派遣して秦王を刺殺させようとし、易水まで来て送別する一段に、「漸離筑を撃ち、荊軻は和して歌い、變徵の聲を爲し、士は皆涙を垂れて涕泣す」とある¹¹⁴。牧齋のこの聯もまた變徵の聲であり、句の構造が上三・下四で切れており、近体詩の二・二・三という切れ方になっていない。「従」「向」で一端屈曲し、その後が続く数文字で激越高揚してくる。本聯もまた筑を撃ち、歌に和している感がある。「簫を吹く」、というのは春秋時代の伍子胥が仇討のために、簫を吹いて呉の市場で乞食をしていた故事を用いている。『史記』范雎蔡澤列傳に、「伍子胥蒙載せられて¹¹⁵昭關を出で、夜に行き晝に伏し、陵水に至るも、以て其の口を齟する無く、刳行蒲伏し、稽首肉袒し、腹を鼓き簫を吹き、呉市に乞食す……」¹¹⁶とある。「呉市に簫を吹く」とは、零落れてしまった英雄の感慨を込めている。牧齋のこの聯は「天北」と「日南」を対にしているが、それ以前の詩にもその用例がある。「別詩・鳥有り西南に飛ぶ」は蘇武と李陵が贈答した詩とされるが、その中に、「鳥有り西南に飛ぶ、熠熠として蒼鷹に似たり。朝に天北の隅を發し、暮に日南の陵に聞く」¹¹⁷とある。この古詩では「日南」と「天北」が対しており、その鳥が長い距離を速く飛ぶ様を表す。牧齋の聯の「天北」と「日南」は土地の広大さを表現しているように見え、北から南まで、いたるところ「變徵の聲」で歌う、死を決意した志士、「簫を吹き乞食をする」落魄の英雄で満ち溢れている状況を意味するように思われる。「日南」は地名（現在のヴェトナムの地）であるが¹¹⁸、「別詩・鳥有り西南に飛ぶ」と牧齋のこの聯の構造を合わせ見ると、事実にはこだわりの必要はなく、南の果ての地を指せばよく、さらにある論者のように、「侯氏の心は南

113 孫之梅は、「『國殤』の句は、侯氏の一門が國に殉じ、生き残った者たちはなおも義を重んじて秦に仕えなかったことを述べる。」と説いているが、意味不明である。孫之梅選注『錢謙益詩選』（北京、人民文学出版社、2009年）、249頁。

114 宋鮑彪原注、元呉師道補正、『戦國策校注』（文淵閣『四庫全書』第407冊）巻9、頁57b。

115 訳者注：「蒙載」は袋に入れられ車で運ばれること。

116 『史記』范雎蔡澤列傳、巻79、2407頁。

117 明馮惟訥撰『古詩紀』（文淵閣『四庫全書』、第1379-1380冊）巻20、頁8a。

118 日南は現在はヴェトナムとなっている。秦は象郡と称し、漢が名称を改めた。その地が日の南に在るためである。

明の永曆帝に捧げられている」と解する必要もない¹¹⁹。

牧齋の詩の末聯に言う、「知る君は王哀の傳を讀むを恥ずるを、但だ生徒をして蓼莪を廢せしのみ。」この聯はやはり意味深長である。王哀、字は偉元、西晉の人で、博学多能、父の儀が司馬昭に殺されたことを恨むあまり、決して晉に仕えぬと誓った。『晉書』王哀傳によると、哀は隱居して弟子に教授し、墓の傍らに廬を建てた。「讀みて詩の「哀哀たる父母、我を生んで劬勞す」に至るに及びては、未だ嘗て三復して涕泣せずんばならず。門人受業の者は、並な「蓼莪」の篇を廢す。」¹²⁰とある。「知る君は王哀の傳を讀むを恥ずるを」云々とは、牧齋が研徳に王哀を手本とするなど訴えているのである。王哀は「蓼莪」を読み、「哀哀たる父母、我を生みて劬勞す」まで来ると涙を流したため、門人たちは彼に同情して「蓼莪」を避けて学ばなかったのである。この詩を論ずる人々は、「これを読めば侯泓の人柄が知られる」¹²¹、「侯涵兄弟を晉の王哀に比擬した」¹²²、「この兩句は、父の墓を哀慕し、故郷を離れなかった王哀に学ばず、抗清活動に身を投じた侯研徳を称赞しており、自ら「蓼莪」を読まず、さらに弟子たちに『詩經』小雅蓼莪を読ませなければそれで十分だ」¹²³などと述べている。この類の解説は、みな詩の字面をなぞり勝手な想像や展開を加えた、「そうに違いない」（想當然耳）式の記述にすぎず、おそらく事実には符合していない。

はるか昔、假我堂の文宴に関して、客の一人であった朱長孺（鶴齡）は「假我堂文謙記」を書き、人々が宴席で交した言説を追記している。

孝章は治城の布衣を談じ（顧子與治）、禎起は渭陽の舊事を述べ（姚子文初）、玄恭は東林の本末を徴し、余は古文の源流を叩い、聖野は橘を包山に種うるを約し、硯徳は綸を練水に垂れんことを期す。¹²⁴（傍点は筆者が加えた）

この一段の文章は牧齋の詩が託した意味及び、「本事」の理解を大いに助ける。「硯徳は綸を練水に垂れんことを期す」を読めば、牧齋のこの聯がなぜここまで厳しい語気を備えているか理解できる。「綸を垂れる」については、姜太公がまだ文王に仕える以前に渭水の岸に隱居して釣糸を垂れていたという伝説があり、後世「綸を垂れる」は隱居あるいは引退を指すようになった。「練水」は嘉定の別名である。これらの材料から想像すると、当日假我堂では、研徳は故郷に帰って隱居したいという願望を漏らしたの

119 孫之梅選注『錢謙益詩選』250頁。

120 『晉書』王哀傳、卷88、2278頁。

121 『皇明遺民傳』に出てくる言葉。謝正光・范金民編『明遺民錄彙輯』、438頁。

122 孫之梅選注『錢謙益詩選』250頁。

123 裴世俊選注『錢謙益詩選』（北京、中華書局、2005年）、175頁。

124 朱鶴齡『愚菴小集』卷9、頁12a-b（437-438頁）。

である。牧齋はその言葉を聞き大いに不同意で、この詩を作り、侯氏一門の忠烈の事跡を特筆大書し、明王朝復活を期し、父の仇に報いるべきで、決して隠居し、消極的に世を避けて暮らした西晉の王裒を手本としてはならないと侯研徳に警告を与えているのである。筆者のこの見解は、「この両句は、父の墓を哀慕し、故郷を離れなかった王裒を学ぶことなく、清に対する抵抗運動に身を投じた侯研徳を称賛しており」云々といった見方とは正反対であり、妥当か否かは、読者の選択に任せたい。

牧齋のこの詩は、寓意があまりにも深く、力強い筆力に彩られ、古典詩史上に残る本当の意味での傑作である。

また、朱長孺には「錢宗伯牧齋先生に投贈す二十五韻」という長詩があり、假我堂の文宴の一年後（順治十二年乙未、1655）、牧齋の家塾への招聘に応じた際の作品のようである¹²⁵。

世變分涇渭 世變 涇渭を分ち
 人倫異菀枯 人倫 菀枯を異にす
 衡門安故柳 衡門 故柳に安んじ
 野服感新蒲 野服 新蒲に感ず¹²⁶
 舊史存周柱 舊史は周柱に存し
 遺書抱魯儒 遺書は魯儒に抱かる
 神傷燕市筑 神は傷つく燕市の筑
 望斷日南珠 望は斷たる日南の珠
 漸與樵漁狎 漸しだいに樵漁なと狎れるも
 惟將竹素俱 惟だ竹素¹²⁷と俱にせん¹²⁸

この数句は社会の激変以降の牧齋の出処進退と抱負を詠じて過不足ない。長孺の詩の中で、「人倫 菀枯を異にす」は牧齋の先の詩と同様に、『國語』掲載の「暇豫歌」の典故を援用しているし、「神は傷つく燕市の筑、望は斷たる日南の珠」が牧齋の一聯「筑を撃ちて涙は天北従り至り、簫を吹きて聲は日南に向うこと多し」を換骨奪胎していることは、更に明らかである。ここから長孺の鋭い直感と、牧齋のこの詩が当時の人々の心の中に占めていた特殊な地位が見て取れるのである。

125 方良『錢謙益年譜』184-185頁を参考にした。

126 訳者注：杜甫「哀江頭」詩に、「少陵の野老聲を吞みて哭し、春日 潛行す曲江の曲。江頭の宮殿 千門を鎖ざし、細柳 新蒲 誰が爲に綠なる。」とあるのに基づくであろう。

127 訳者注：「竹素」は「竹帛」に同じ。史冊、書籍を指す。「次第に一般庶民に慣れ親しんで来たが、やはり史書こそ私の友達だ」の意味。

128 朱鶴齡『愚菴小集』卷4、頁1a-b (169-170頁)。

後世に牧齋の詩の良き理解者がいた。乾隆期の詩壇の長老沈德潛（字は歸愚、1673-1769）こそその人である。歸愚は自分が編纂した書『國朝詩別裁』に牧齋の「侯研徳に簡し並びに記原に示す」詩を取録し、次のような評語を加えている。「王哀は、其の忠孝を許えざる者無し、此れ又た翻進すること一層にして、倍ます新警なるを覺ゆ。」¹²⁹ 歸愚はここでは牧齋詩の末聯における王哀の典故の使い方が、「忠孝」という常識的な意味から、いかに「翻進すること一層」であったかを明らかにしているわけではないが、牧齋詩のこの聯の字面の意味以外に更に深い寓意があることを沈德潛が捉えていたことは、はっきりしている。歸愚の評語は、たった数語ではあるが、一つの証拠たり得ており、筆者の牧齋詩に対する解釈があながちでたらめなものではないことがお分かりいただけるであろう。

最後に、これまでの論議に関連して、牧齋のこのテキストには、なお解決すべき問題が一つ残されている。この詩の本文の後に、「箋に曰く」という文が付されており、侯峒曾と黃淳耀が城を守備して節に殉じた事跡が記述されている。文章はよく練られており、内容にも過不足なく、歴史家の筆になると思われる。この文章はいったい誰が書いたのか？ 牧齋の詩は遵王が注釈を施しているので、体例から判断するとこの「箋」は当然遵王のものとなる。しかし、この段の箋文を細かく味わうと、牧齋本人の文体に酷似する。そのうえ、侯峒曾と黃淳耀の二人は牧齋との情誼が非常に深いので、詩の後に一筆付け加え、古い友人を顕彰したのだとしてもまったく問題がない。これがまず一つめの疑問である。そして、牧齋の『初學集』『有學集』を調査すると、詩文の後ろに「箋に曰く」が付加されているのはこの一例だけで、普通の扱いはない。この詩はなぜこのように処理されたのであろうか？ これが二つめの疑問である。この二つの疑問点はまことに意味深長であり、筆者はまだ解答を持ち合わせておらず、他日を待ちたい¹³⁰。

五、結語

牧齋の詩は難解であるとされる。今まで論じてきた二首の詩は謎めいた言葉に彩られ、解釈は困難を極める。現代の研究者が「侯研徳に簡し並びに記原に示す」を解釈す

129 清沈德潛選編、李克和等校點『清詩別裁集』（長沙、岳麓書社、1998年中華書局の清乾隆二十五年〔1760〕教忠堂重訂刊本影印本によった校点本）巻1、6頁。

130 訳者注：『錢注杜詩』には、「箋曰」という表現が数多く登場し、そのほとんどは、単なる言葉の用例の説明ではなく、重要な史実をあげたり、通説を覆したりしている。ゆえに訳者は錢謙益の筆と考えている。

る際にも、完全な理解には到達できないにもかかわらず、朝鮮の文人南九萬は十七世紀にこの二首の律詩を見て、直ちに詩の中で最も重要な意味を持つ二聯を指摘しており、その見識の高さは尋常のものではない。中國と朝鮮は「同文の夢」を見ること久しく、互いに共有する文化の伝統の淵源は深遠で、比較研究を行うべき課題もまた多いことがわかる。

さらに言えば、「擊筑」の音は、牧齋の詩文の特に優れた特徴で、評価する人はかなり多い。朝鮮のもう一人の文人李天輔（イチョンボ、1698-1761）は、「金誠之（致一）の燕行を送り、錢牧齋の集を購うを乞う」詩の中で次のように言っている：

人歸易水幾秋風 人 易水に歸りて幾たびか秋風ふくや

寂寞燕南俠窟空 寂寞たる燕南 俠窟空し

錢氏文章如擊筑 錢氏の文章は筑を撃つが如し

願聞餘響百年中 願わくは餘響を百年の中に聞かん¹³¹

清の乾隆帝が十八世紀に厳しく牧齋を指弾する以前は、中国本土と同様、朝鮮の文人の中にも牧齋の人と爲りや詩文に憧れる人は少数ではあるが存在したのであろう。

131 李天輔撰、『晉菴集』（1762年刊本）（1998年『韓國文集叢刊』第218冊）卷1、頁33a（137頁）。